

<特集随想>最後の授業

著者	福田 由美子
雑誌名	日本文学誌要
巻	51
ページ	114-116
発行年	1995-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019807

くと、どうしてあんなに勇気が湧いてくるのでしょうか。私以外にもそうした経験を共有している方が大勢いらっしやるのではないかと思います。

ところで先生から教えていただいたことは沢山ありすぎて、到底私の能力が及ぶところでは消化できるものではありませんでした。先生は私に「君がどんなに沖縄を愛したとしても、沖縄を内側からみることは決してできない。沖縄を外側からみなければいけない。君は大和人であり、沖縄人ではない。君の研究においては、沖縄を外側から客観的に捉える方法を探らなければならない。」とおっしゃられたことがありました。久米島のフィールドワークを行い始めた頃だったと記憶しております。最初、私にはその意味が全く理解できませんでした。南島研究を継続していく中で、先生のこの言葉は決して忘れることなく心の中で常に反芻しておりました。それから十数年を経た今日、奄

最後の授業

十二月十二日に一部ゼミでの外間先生の最後の授業があると伝え聞き、仕事もそこそこに、久し振りに懐かしの学び舎へと足を運んだ。現役学生の中に紛れ込み、大胆にも五十分の講義を万感の思いで受け

美大島で生活するようになってようやくその意味が実感として理解されつつあるように思います。私が先生から教えていただいた研究訓として、最も大切にしている言葉です。

私は、先生に南島文学の手解きをしていただきながら、他分野の研究に進んでしまった恩知らずの教え子であります。先生からいただいた学恩にお返しするような研究が現在の私にはありません。外間先生の御寛容に期待して、全てのお許しを願うばかりです。先生の学恩に少しでも報いられるよう奄美で研究に精進いたします。

南島という素晴らしい研究フィールドに導いてくださった先生に感謝申し上げます。外間守善先生、ありがとうございます。先生の御健康と一層の御活躍をお祈りいたします。

(たかなし おさむ・一九八九年日本史学専攻、博士課程修了)

福田 由美子

た。

終業の十分ほど前になり、外間先生が二十七年間の思いを語り出そうとしたその時、八七六教室に長く…そして深い沈黙が垂れこめた。

先生は両腕でご自分の身体を支えるかのように、教卓の角に両手をつき、そのまま下を向いてしまったのである。そして先生の肩が微かに震えたようにも見えた。

先生のそのような姿を私は初めて目にした。外間先生……といういつも前向きで力強く、また何よりも美しいものがお好きだ、という印象がとても強いのは私だけであろうか――。

私の中に最も鮮明に焼きつけられている外間先生のお姿といえば、まずは沖縄戦を語ってくださった時の先生である。

先生はめったに戦争については話してくだらないが、それでも年に一度ぐらいの割合で実体験を聞かせてくださった。その内容は、軽い気持ちで聞こうとしていたことが恥ずかしいと反省させられるようなとても残酷なものであった。その時の先生は淡々とした口調ではあったものの、瞳だけはどこか遠く、過去を見つめているようだった。「口ほどにものを言う」というその瞳は、今もなお私の中で淋し気に語りかけている。

二つ目は、私達が大学四年の十二月、学生最後のゼミ合宿でのこと。沖縄の正統派空手道剛柔流の師範級の腕前でいらっしゃる外間先生、対するは我らがゼミ長、法政大学体育会空手部に所属していた志田朋子さん……という二人の夢のような演武が実現した。あれは沖縄文学の旅の歴史に残る(?)名アトラクションではなからうか。伊江島のヒルトップホテルの地下に新設された宴会場の舞台で、先生は所狭しと華麗な足さばきを披露してくださいました。「流派が違う」という大きな障害を乗り越えられたのか、はたまた最初から「そんな些細なこと……。」と気にも留めていらつしやらなかったのか?。先生は志田さん相手に空手の型を熟演された。先生のあの勇姿を拝見できた私達は実に果報

者である。

ところで何故このような演武が実現したかというと、それはまさに「志田、沖縄と一緒に空手をやろう。」という外間先生の鶴の一声にほかならない。あるいは先生は、ほんの冗談のつもりでおっしゃったのかもしれないが、あの時志田さんは先生と一戦を交えるために、律儀にも胴着を旅行かばんの奥底にしまい込み、東京から持参していたのであった。

最後になったが、外間先生といえばやはり美しいものに弱い……というとても正直でいらつしやるところではないだろうか。なにせ先生曰く、「外間ゼミは美人しか入れない。」とご自身で断言されるように、実際私達の前の代までは確かに美人が多かった。外間ゼミの路線が狂ってしまったのは、先の空手の話もしかり、私達の代が原因なのかもしれない。外間先生……ごめんなさい。

さて先生の美意識の最も顕著な例といえば、やはり奥様ではないだろうか。いつのことだったかは忘れてしまったが、私がまだ学生だった時分に、「矢部も早く結婚をして、うちの奥さんのようになりなさい。」というようなことを先生に言われたことがあった。今思い出してみてもドキドキしてしまう。もしかすると、先生のお宅では冬でも暖房がいらぬ位にアツアツなのかもしれない?。そんな先生と奥様の暖かいご家庭を垣間見ることができたのは、卒業式後の先生のお宅でのパーティーだった。外間ゼミの卒業生ならば、きっと誰でも思い出に残る出来事であるに違いない。先生に迎えられて部屋に通されると、先生と奥様は何日もかけて仕込んでくださった料理の数々がテーブル一杯に並べられていた。そしてお二人の優しい笑顔に包まれて、懐かしいゼミでの思い出話にも花が咲いた。振り袖に袴姿にもかかわらず



騒ぎ回る者や、さつさと普段着に着替えて、そのおいしいお料理を満喫する者、と本当に楽しい一時を過ごすことができた。帰り際、いつまでもいつまでも玄関先で私達を見送ってくださったお二人のお姿が、今も脳裏に焼き付いている。

——外間先生の長い沈黙は、実はほんの五分位のことだったのかも知れない。でも私は、こうしてその沈黙の中で二年間分の先生のお姿を思い起こしていた。そして恐らく先生もまた、二十七年間分のご自分の姿を思い廻らせていらつしたのだろう。

「外間ゼミは本当に楽しかった。ゼミは私の生きがいでした。…もっと色々と話そうと思っていたけれど…ごめんなさい。これで終わりにします。…ありがとうございます。」

静かに、そしてゆっくりと先生の言葉が最後の授業を締めくくった。

外間ゼミが法政大学に誕生したその年、私もこの世に生まれた。二十七年という歳月を私なりにかみしめながら。

外間先生、お疲れ様でした。そして…ありがとうございました。

(ふくだ ゆみこ・旧姓 矢部・一九八九年卒)